

地域事例-3



日本最大の風力発電基地として全国に一躍その名を知らしめた苦前町。風力発電への取り組みは、マイナスイメージばかりが先行していた“風”をプラスイメージに転換し、地域資源を有効に活用するという次代に向けたまちおこしの第一歩でもあるようです。



「風」のまちから「風車」のまちへ

❏ 厄介ものから、まちの宝に

苦前町は日本海沿岸、留萌管内中央部に位置し、人口約4,600人、沿岸では漁業が、内陸では農業が盛んなまちです。昔から11～3月の冬場にかけての日本海特有の強い風は、地元の人たちにとっては厄介ものでした。強風で雪が舞い上がり、前が見えなくなる地吹雪で、自動車の時速が10km以下になったり、ひどいときには交通アクセスが寸断されることもありました。国鉄が運休になって、町内では学校が休みになることも。風は生活する上では障害でしかなかったのです。しかし、その強い風をまちの特性として捉えようと'74年に『町民風上げ大会』が開催されます。町内には東北方面からにしん漁従事者として出稼ぎに来ていたやん衆が根付いた歴史もあり、風に強い津軽風の技術が残っていました。その文化の伝承という意味もあり、風上げ大会が始まったのです。現在も続くこの大会は'93年からは『北海道風上げ大会』と衣替えされています。

風上げ大会のスタートで風を遊びのなかに取り入れてからは、風をもっとプラスに、生産性のあるものにできないかという模索が続きます。また、住民自らがまちを考える機会を作ろうと、'88年にまちおこし協議会が設置されます。50人の委員を任命し、まちおこしや地域振興発展に関する事業についてさまざまな提言を行政に行うなか、'95年、風力発電を視野に入れた自然エネルギーの活用についての提言が出されたのです。当時、風力発電については行政内部でも検討が進められており、住民側からの提言は追い風となりました。またこの年、山形県立川町で開催された第1回風サミットに町の代表が出席し、風車研究の第一人者でもある三重大学・清水幸



夕陽ヶ丘オートキャンプ場からは、町が設置した風力発電施設が眺められる。

丸教授と出会い、これが大きな転機にもなりました。さらに当時は国の風力発電への注目度も高く、'95年度には通産省、'96年度には新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）の助成を受けての風況調査とともに、三重大学との共同研究を実施。今まで肌では感じていたものの、風の強さを風況でデータとして客観的な評価をしてみることで、発電には十分な風力があることが実証され、この結果は大きな自信にもつながりました。

■ 農業生産基地とエネルギー生産基地の融合

'97年に入り、調査結果が公表されると、(株) トーメン、電源開発などが独自に町内での調査を開始し、大型風力発電事業に名乗りをあげます。トーメンは(株) トーメンパワー苫前を設立し、総発電出力20,000kW（20基）の規模で昨年11月から運転を開始。電源開発は苫前町、オリックス、カナモトなどとともに(株) ドリームアップ苫前を設立し、総発電出力30,600kW（19基）の規模で今年12月の運転開始を目指して建設が進んでいます。(株) ドリームアップ苫前の運転が開始すると、町内の年間発生電力量は一般世帯が年間に消費する電力量に概算して約31,000戸に相当するといわれています。

両社の発電基地となるのは苫前町市街よりも南に位置する上平地区にある約300haの町営牧場。大型風力発電基地には、①発電に十分な風、②発電機が効率的に作動する規模の用地と、基幹アクセス道路が整備されていること、③送電線との系統連系が速やかに行えること、の3つの条件があります。送電線との距離が短く、コスト的にも好条件と、最も難しい③の条件をクリアし、残り2つの条件も合わせ持っていたのが町営牧場でした。しかし牧場用地は

第1種農用地のため転用が必要で、農村活性化土地利用構想により最小限度の農用区域の除外と農地転用の許可を受けました。風力発電は全体としては広大な土地が必要ですが、永久の農地転用が必要な用地は風車が立っているわずかな部分だけですから、永久転用は全面積のわずか0.2%。2社が本格的に事業を開始する上平地区は、農業生産基地とエネルギー生産基地を融合させ、共生させた日本で初めての基地ともいえるのです。

■ 国の電力政策に期待

上平地区の民間2社が苫前での大規模な商業運用に踏み切った要因には、'98年4月から北海道電力が発表した風力発電の電力購入メニューと、NEDOによる新エネルギー事業への助成支援です。

北海道電力では'98年4月に、事業目的の大規模な風力発電について、長期契約を前提として新たな電力購入メニューを設置しました。これは17年間にわたり単価を保証する制度で、1kWh当たりの購入額は火力や原子力の発電コストよりも高い11円60銭（特別高圧連係の場合）と設定され、いち早く北海道電力との契約を済ませたことで、17年間の契約による安定的な収入が見込めることとなりました。その後、北海道電力では、風力発電の電力購入については一定の購入枠を設け、一部入札制が導入されていますが、この対象にはならず、先進的な取り組みが効を奏しました。またNEDOの助成制度により、事業者は3分の1、地方自治体は2分の1の補助を受けられ、イニシャルコストの軽減が図られることにもなりました。事業の安定性、事業導入期の経費補助による参入促進と、大きな追い風が吹き、苫前町



上平地区は、今年12月から(株)ドリームアップ苫前の19基が加わり、全39基での運転となる予定だ。

Case Study @ tomamaecho.

での国内最大級の風力発電基地が誕生することになったのです。

とんとん拍子で進んできた苫前町の風力発電への取り組みですが、“風”への思いは、はるか昔から。クリーンエネルギーへの注目、国や電力会社の支援策、そして行政と地域住民の思い、これらが機を熟して完成したのが、苫前の風力発電ともいえるでしょう。

道内では風力発電の可能性が50万kWとも60万kWとも言われ、町内だけでも海岸線から2km範囲内では（送電線容量といった大きな問題を無視すれば）、さらに30～40万kWの可能性があるとされています。自然エネルギーの導入が進むドイツでは電力会社による自然エネルギー購入が義務化されていますが、日本ではまだ検討段階。エネルギーの多様化、二酸化炭素排出削減など、自然エネルギーの利用を支援するためにも、今後の自然エネルギー導入促進に向けた電力政策に期待がかかります。

❖ 地域資源をどう生かすか

町内には、このほかに町が自ら計画する風力発電施設が3基あり、すでに2基が運転を開始しています。上平地区を北上した海岸線にあり、発電施設に隣接して中国海南島から取り寄せた白い砂が敷き詰められた海水浴場ホワイトビーチ、夕陽ヶ丘オートキャンプ場、今年5月にオープンした「とままえ温泉ふわっと」と、観光施設が続き、発電した電力は風車のライトアップや各施設に利用されています。この地区は風車の持つ魅力を目で見て確かめてもらうことを意識し、あえて観光施設に隣接させたともいえます。これらの施設がある地域は漁港に近く、漁港の後背地開発計画の側面からも、早くから構想が進められてきました。風力発電の実現により、今後冬期間の融雪ヒーターの検討をはじめ、養殖の熱源への利用、深層水くみ上げへの利用など、クリーンエネルギー

ーと産業への連携についても大きなビジョンが描ける可能性が秘められています。また環境への配慮という点では、町内に30戸ほどある酪農家の家畜糞尿処理のバイオガス検討など、エネルギーミックスを行い熱転換や飼料転換を図るなど、1次産業への連携も長期的な視野の一つに考えられます。

風という資源を活用して好調にスタートしたエネルギー循環の取り組みから、今後、地域資源全体を活用した循環型地域社会にどのように展開していくのか。それは苫前町の今後の課題であるとともに、周囲の期待でもあるでしょう。

同時に、短期的には、町営牧場への視察・見学者が増えたことから現在の牧場機能に加えて、観光要素を組み入れた機能整備を、進入規制も含めて検討しなければならない時期になっています。さらに、まちづくりの顔としての機能もあり、こうした機能の交通整理をどのように進めていくのが、今後の課題ともいえるでしょう。

風という厄介ものを地域の資源としてスタートしたまちづくりは第一歩を踏み出したばかり。着実な歩みで後世に残るまちづくりを実践してほしいもの



「とままえ温泉ふわっと」は宿泊のほか、多目的ホールもあり、プールも隣接。温泉は源泉100%で、地元客にも人気。



海岸線から見た上平グリーンヒルウィンドファーム発電所。